

あるむぜお79

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 79

2007年3月20日



1976年（昭和51）1月撮影の宮町、現在のフォーリス付近。右は旧甲州街道、東京方面を見る。

（写真No. 1193-01a、01b）

目次

- 1-3 宮本常一の見た府中 その8
パノラマ一眼に見えた世界を広く切り取る一
 展示会案内 特別展
宮本常一の足跡―旅する民俗学者の遺産―
- 4-5 ノート 河原は昔のままだ良い!?
 川の自然観察考 3
- 6 収蔵庫のニューフェース
- 7 最近の発掘調査
 出るか？ 国司の居宅跡
- 8 展示室リニューアルトピックス ④

ここにかかげる写真は一見して何でもな
 いつまらぬものが多い。家をとったり、山
 の杉林をとったり、田や畑をとったり。し
 かし私にはそれが面白いのである。そこ
 には人間のいとなみがある。そして一たん土
 地がひらかれ、家がつくられると、こんど
 はかえってそれに人がしばりつけられて、
 その家や耕地を中心にして行動するよう
 になる。…（中略）…だから私はそういう
 ものをもみのがすことができない。

宮本常一『私の日本地図1 天竜川にそって』
 （1967年 同友館）より

表紙の写真、店舗、看板、道路の状況など、当時を知る方にとってはとても懐しく、たくさんの思い出を語れる写真ではありませんか？もちろん、かつての府中を知る上でも貴重な写真であることは間違いありません。構図がずれていますがパノラマ撮影を意図した2枚を合成したものです。写真に写る「中万」は、現在フォーリス内の一店舗になっています。写真右には大國魂神社鳥居、左にはケヤキ並木があります。

さて次に、右の写真をごらんいただけますか？

写真を何気なく並べたらつながっていました。宮本常一は一枚の写真から非常に多くのことを読み取り、記憶とあわせていつまでも話をするのができたと言われています。そんな彼がパノラマ写真で広範囲を切り取ろうとしていたことは興味深いことのひとつです。

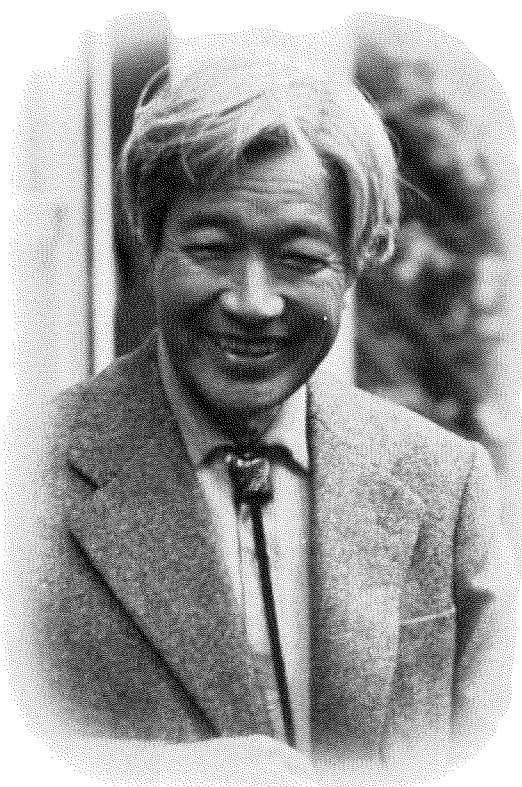
府中を撮影したものでは、ハケの道、浅間山などもあり、新町で写したものでは8枚をつなげたパノラマ写真も探し出すことができました。それらすべてが、今となっては目にすることができない、その当時あたり前に広がっていた風景であることは言うまでもありません。



1961年(昭和36)7月撮影
新町3丁目自宅周辺
(写真No. 229-08a ~ 09b)
草の茂る野原(畑?)の先に
まばらに家が見える。もち
ろん現在こんな風景はない。
『あるむぜお』73の表紙は
一番左の写真。

こうした宮本のパノラマ撮影の視点は写真家
荒木経惟(アラーキー)によって右のように温か
く評されています。

展示会案内



府中市郷土の森博物館開館 20 周年

みやもとつねいち あしあと 宮本常一の足跡

日本のすみずみまで歩いた「旅する民俗学者」宮本常一(1907～1981)は、協力者・渋沢敬三のもと、アチックミュージアム(現・神奈川大学日本常民文化研究所)で、矢われてゆく資料の収集整理に尽力し、日本を代表する民俗学者として民俗調査、民具調査をした外、農林業振興、離島振興、佐渡の國鬼太鼓座(現在の鬼太鼓座、鼓童などのルーツ)結成、周防猿まわしの復活等の芸能振興など、多方面で活躍した人物です。

また名作「土佐源氏」「梶田富五郎翁」などを収める『忘れられた日本人』等、数々の名著も残しました。

宮本は、1961年(昭和36)から亡くなるまでの約20年間府中市に住み、武蔵野美術大学教授、日本観光文化研究所所長、府中市文化財専門委員会議長などをつとめました。



よく気づいているというか、眼の勘がいいね。眼のつけどころ、なんていうと、なんか探しているような感じがするけど、そうじゃなくて、向こうが見させてるんじゃないかな。

そう、パノラマ写真が好きだったのか。パノラマ写真が好きというのはね、パノラマ写真じゃなく、パノラマが好きなんだよ。写真というのはフレーミングしちゃうことじゃない。でもフレーミングなんかしたくないんだよ。みんな見たいんだよ。貪欲っていうか、全部視野に入るものをみーんなみたいっていうかさ。記録って言葉をだすと、全部記録したいっていうか、何でも魅力あるんだっていうか、何でも貴重だっていうか、何でも何かあるんだという気持ちだね。

(荒木経惟「風景」というより「情景」だね)

『宮本常一 写真・日記集成』附録より)

これら何気ない写真は、その量、視点とともに写真家のなかでも評価されています。彼の写真約5,000枚を日記とともにまとめた『宮本常一 写真・日記集成』(2005年 毎日新聞社)は、第17回写真の会賞を受賞し、写真家の世界でも注目されています。

まだほんの一部しか紹介していませんが、宮本の残した府中の写真は約1,000枚。さまざまな視点から活用できると思います。

宮本常一生誕 100 年記念特別展

2007/4/28 (土) ~ 7/1 (日)

休館日：毎週月曜日 4/30 は開館
5/29 臨時休館

旅する民俗学者の遺産

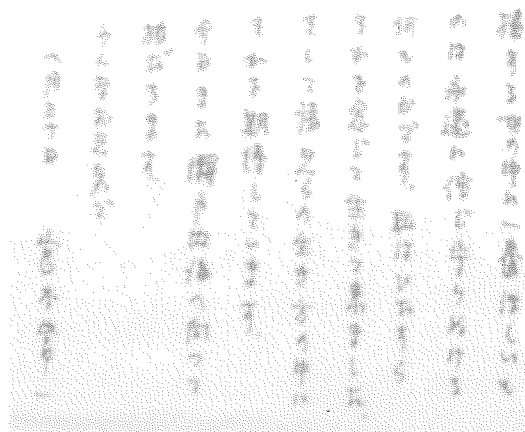
本年は彼の生誕 100 年にあたります。当館ではこれを記念し、宮本が日本全国に残した足跡を、ゆかりの品々からたどります。

★関連企画

- ・よみがえる肉声「郷土大学講義」上映会 5月の土・日
- ・記録映画「周防猿まわしの復活」上映会 6/2(土)
講師：民族文化映像研究所所長 姫田忠義氏
- ・猿まわし公演 出演：周防猿まわしの会 6/3(日)
- ・鼓童演奏会 6/17(日)
- ・記念講演会 6/23(土)
講師：中国新聞記者 佐田尾信作氏
- ・坂本長利一人芝居「土佐源氏」6/23(土)・24(日)

☆連携企画

- 鬼太鼓座公演 (於府中の森芸術劇場) 6/16(土)



1973年(昭和48)7月30日、佐渡の國鬼太鼓座に送られた直筆手紙の一部。現在、この手紙は佐渡の國鬼太鼓座をルーツにする太鼓集団 鼓童に受け継がれている。

詳細は博物館かんだい、博物館HP等をのぞいてください

河原は昔のまが良い!?

「カワラノギクの苗を植えさせてもらえる場所を探しているのですが……」 昨年春、「府中かんきょう市民の会」の方が当博物館を訪ねて来られ、こう切り出しました。カワラノギクは、関東地方と中部地方東部の河川にのみ生息する河原の特産植物で、増水すると急流が洗うような、小石の多い中流域に生える多年草です。現在の多摩川にはカワラノギクの自生する環境が大変少なくなっており、会の方は、この貴重な植物を絶やしてはならないと、府中産の種子から発芽した苗を毎年この付近の河原に植え続けてきたそうです。近年の河川改修工事で、植える場所もままならず、その分許可申請の手続きも時間を要するなど、困惑した上での相談でした。さてさて一体どしたのか……

川本来の河原形成

日本の川は、川幅の狭い急傾斜の山間部を下るため、水流による土砂や石の運搬能力が高い特徴があります。やがて山を下り終わって川幅の広がる平野部に出た時、流れの勢いは弱まり、運ばれて来た土砂や石はそこに堆積します。積もった土砂によって地盤の高い部分ができると、今度は地盤の低い方へと流れは向きを変え、長い年月の間には次々と同じように土砂は堆積して、扇状地と呼ばれる扇形の地形を形成します。さらに中流の

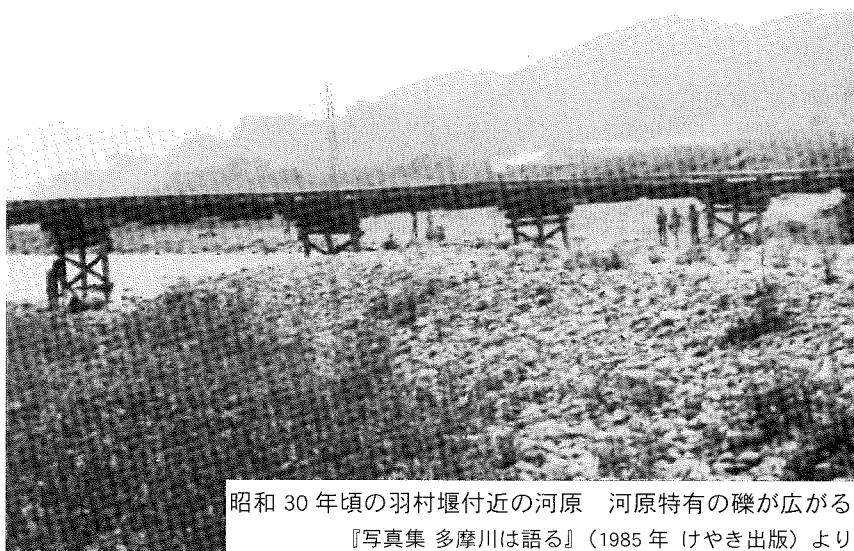
流れは蛇行しながら進んで行くので、深くて淀むカーブの内側にもそれぞれ土砂が堆積し、交互砂州というものを作っていきます。砂州は、水の深さに比べて川幅が非常に広い場合は左右両側に形成されたり、川の中央部に中州を生じる所もあります。こうした基盤の上に成り立ち、山間部では存在しなかった河原……特に扇状地河川特有の礫河原という新たな環境は、洪水・増水という自然の力に支配された川の働きによって作られ、常に変化する空間だったのです。

河原は変わった！

河原を生育場所とする生き物は、強烈な日差しによる乾燥や増水時の冠水に耐えなければなりません。もちろん植物にとっても非常に厳しい環境ですが、それぞれの種がこの環境に適応した生活様式を備えながら河原固有の生態系を作ってきました。カワラノギクもこうした中、丸石の間に堆積した土砂の混じる貧栄養の砂礫地に適応して生育していたのです。たとえ幾度もの洪水が起きて、居場所を追われたとしても、新たな砂礫地が形成されれば、カワラノギクも新天地に生活の場を移動します。このように生育に適した立地を渡り歩きながら、つまりは洪水による河原の攪乱とうま

く付き合いながら生きてきたということになります。しかしながら、こうした河原の植物が様々な要因で生活の場を追われる時代が訪れました。

都市の人口集中化で多摩川の水は利用度を増す一方、流域の洪水被害も数多く記録されるようになりました。1910年（明治43）の大洪水を契機に1918年（大正7）から改修工事が始まり、川の様子は変貌を遂げ、1957年（昭和32）



昭和30年頃の羽村堰付近の河原 河原特有の礫が広がる
『写真集 多摩川は語る』（1985年 けやき出版）より

には上流奥多摩の山間部に小河内ダムが完成しました。ダムの放水量調節や上流羽村堰での取水に伴い、完全な治水・利水型となった多摩川の河川管理は、谷の出口に堆積する小石や土砂の量にも制御をかける結果となりました。時代の流れとともに河川整備にも拍車がかかり、現在では洪水による影響の少ない、ますます安定した環境基盤になっています。特有植物のカワラノギク・カワラニガナに始まり、カワラバツタ・カワラエンマコオロギなどの昆虫、礫河原に営巣するイカルチドリやコチドリなどの野鳥は姿を消していき、代わって安定した土地に根付くオギやハリエンジュが繁茂し、樹林や帰化植物のフィールドと化したのです。

▼ 昔の河原を再現する！

草地や樹林を棲みかとする生き物にとっては、安定した河原は最適な生活基盤です。大きな変化の少ない河原の生態系では、ホオジロやムクドリなどの林や都市に依存する種が特有种に代わって増えていきました。確かに 30 数年前より水質は浄化されました。一旦は姿を消したカワセミやアユも戻ってきました。安全な水の通流と効率良い取水の歴史は、紆余曲折を繰り返しながらも人にやさしい河原の環境を守ってきましたが、“変化する”本来の河原は置き去りのままでした。そんな折、治水利水の体系的な制度の整備が主体だった河川法が、新たに「河川環境の整備と保全」の追加を伴って改正されました。憩いの水辺空間として多種多様な生物の生息や生息環境の充実が求められることになったのです。

河口から遡ること 52km、多摩川の流れが奥多摩の山を抜け出て平野に広がるあたりに永田地区と呼ばれるエリアがあります。30 年前は礫河原で占



永田地区伐採跡
『多摩川水系河川整備計画読本』(2001 年 河川環境管理財団)より

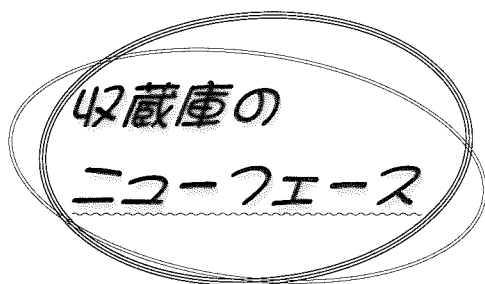
められていた場所もハリエンジュを中心とした樹木が覆う林に変わっていました。この場所で、生態学的観点から河川を理解し、川のあるべき姿を探るために、研究者や市民グループによって従来あったはずの生態系回復に向けた試みが始まりました。すでに 2001 年(平成 13)から樹木を伐採する工事を進め、伐採後の地面を掘り起こした上で、玉石混じりの河原を再生する目的です。もちろんカワラノギクの保全も含めての実験的措置ですが、これによって本当に昔の河原が蘇るのかどうかはわかりません。しかしながら、自然の本質を再考する方向性が打ち出された事例として興味深く期待を持って見守りたいと思います。

郷土の森園内に植栽されたカワラノギク



元気な花が咲きました

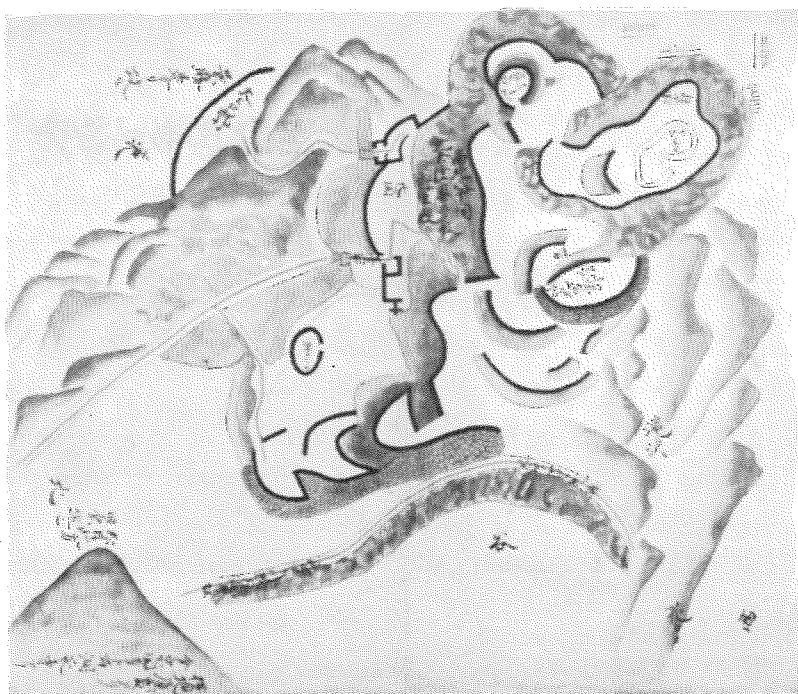
多摩川を熟知した上で関わりを持つことが、今後の課題でもあります。流域懇談会やリバーミュージアム構想といった様々な取り組みが発進し、各地域ごとに「水辺の楽校」なる川の学習ゾーンも設置されています。これに伴うワンドなどの造成工事で、再び河原の様子は人工的に変わりました。そんな最中に持ち込まれたカワラノギクの一件でした。当博物館の大部分は多摩川河川敷を造成して築造された施設です。玉石混じりの土台ではないにせよ、河原だった場所なのです。河原固有の貴重種を、いつか本来の姿に再生された河原に戻す思いは、会の人たちと共通でもあります。喜んでお預かりすることを決め、5月には市民の会のメンバーによりカワラノギクは無事移植を完了……秋には元気に花を咲かせてくれました。



武州八王寺城図 購入資料



御主殿の裏手に残る石垣



縦 35 cm、横 41 cm の絵図。御主殿は中央やや上にあり、所々に石垣が描かれています。左上（東方）の「影勝此れヨリ攻ル」の書き込みは、上杉影勝の進軍経路を示しています。はちおうじは今日、八王子の字をあてていますが、絵図の裏に「武州八王寺城図」と記されているので、資料名称はこれに従いました。

郷土の森博物館が収蔵する資料のほとんどは、市民の方々から寄贈、寄託していただいたものです。しかし、地域の歴史や文化を考えるのに役立つ資料を購入することもあります。

昨年度、古城の絵図 3 枚を購入することができました。八王子市にある八王子城、滝山城、片倉城という 3 つの戦国時代の山城を描いたものです。3 枚の古城図のうち、ここでは八王子城を描いた絵図を紹介しましょう。

八王子城は戦国大名小田原北条氏の支城の一つ、城主は小田原北条氏の 3 代氏康の次男・氏照です。城は天正 18 年（1590）、豊臣軍の激しい攻撃を受け落城、戦国時代の終わりを告げた城として知られています。また、発掘調査により、御主殿の跡が姿をあらわし、落城の様子を彷彿とさせる多量の陶磁器や、ヴェネチア製のレースガラスなどが出土したことで注目されています。

さて、今回館蔵となった「武州八王寺城図」は、彩色鮮やかな絵図です。制作年は明記されていないので、詳らかではありません。しかし、こうした古城図は、もっぱら江戸時代になって、軍学の資料として制作されました。しかも、「武州八王

寺城図」は津軽家文書のなかの『築城規範』に収められた「武州八王寺城」と瓜二つなのです。『築城規範』は、各地の古城図の集成としてよく知られているもので、寛文 12 年（1672）に制作されています。「武州八王寺城図」は、『築城規範』所収図か、そのもとになった原図から筆写されたと考えられますので、これも寛文 12 年からそれほど遅れることなくできあがった可能性があります。このように、江戸時代になっての制作とはいえ、今日に比べれば城の本来の様子をよく残していた段階の絵図として評価できます。

最後に、八王子城と府中のかかわりについて、手短かに述べておきましょう。江戸時代の後期に編纂された地誌を紐解くと、府中市内の旧家の多くが、小田原北条氏の家臣で、八王子城の落城とともに、府中へ移住したとか、帰農したと記されています。この伝承がどこまで史実かはわかりませんが、八王子城の落城が、府中の町に大きな影響を与えたことは間違いありません。「武州八王寺城図」は城の往時の姿を想像させてくれるだけでなく、府中の歴史を考える上でも貴重な資料といえるでしょう。

出るか？

国司の居宅跡

府中町二丁目

府中市遺跡調査会

紺野英二



2 棟の掘立柱建物跡（他に 3 棟あります）

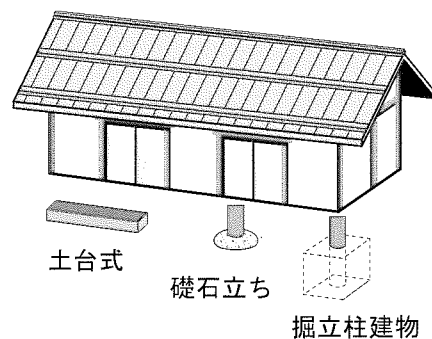
今回は、京王線府中駅の南側の調査について紹介します。

府中市の市名の由来は、奈良時代・平安時代（今から約 1,300 ～ 800 年前）にかけて置かれた“国府”にちなんでつけられました。国府とは各国に置かれた役所のこと、国府の中心施設を“国衙”といいます。武蔵国の国衙は、現在の大國魂神社の境内地とその東側の地区にあることがわかっています。

今回紹介する地区から宮町 1 丁目の付近は、現在、府中駅南口再開発第二地区（フォーリス・伊勢丹）や同第三地区（くるる）を含む賑やかな地区です。当時も“国衙”に非常に近く、人口の密集した地区だったようです。役人が身につける帯金具、刀子・硯などの筆記用具の他に、倉を管理するための鍵（クルル鉤・海老錠）など、“国衙”の機能と密接に関わる遺物が出土しています。さらに第三地区では、「南曹」や「目」など、国府の役所・役人を示す墨書土器が発見されています。

この調査地区は、再開発第三地区から東に 100 m ほど離れた場所で、5 棟の掘立柱建物跡を発見しました。建物跡の柱穴は、直径、深さともに約 50 cm で、必ずしも大きくはありませんでしたが、柱を立てる際に埋められた土は、堅く締まっていた。この地区では、同時期の竪穴建物跡が見つからないので、庶民が住むことのできない地区だったと考えることもできます。

この建物群の性格を考える上では、付近で発見された墨書土器「目」が見逃せません。文献史料によれば、「目」とは、都から赴任する国司の役職（守、介、掾、目）の一つで、武蔵国府の場合、“目”の定員は 2 名でした。ならば、「目」の居宅が近くにあってよかった。今回発見した掘立柱建物跡の規模からすると、都から派遣されたエリート役人の居宅としてはすこし貧弱で、「目」の居宅そのものとはいえません。しかし、「目」の生活を支える人びとが常駐した建物群と考えることは許されるでしょう。近い将来、周辺で「目」の居宅が発見されることに期待したいと思います。



建物の種類

建物には、柱の建て方によっていくつかの種類があります。掘立柱建物は、柱穴に直接柱を埋め込んで建てた建物です。このほか、礎石や土台の上に柱を立てるものもありました。

④ 工事の予定

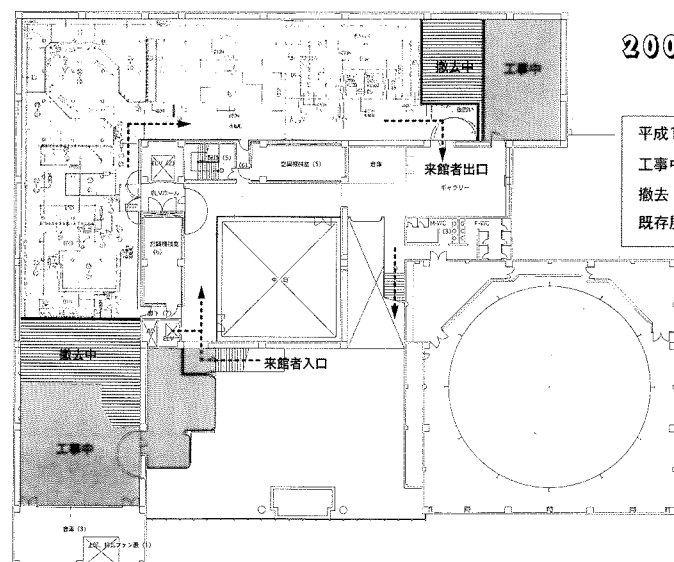
このページでは、2007年度～2011年度の間に予定している常設展示室のリニューアル計画について、その概要と目指すところをご紹介します。今回は、いよいよ工事に取り掛かることになる新年度を目前にして、今後の工事計画についてお知らせしておきます。5年間という長期にわたる実施ですので、工事中は何かと観覧にご不便をおかけすることになりますが、

どうかお許しください。

下の表のように、毎年、旧展示を部分的に撤去しながら、新しい展示を据え付けていき、完成した順に次年度新規オープンする、という予定です。ただ、外部で作りこんでくるものも多いので、実際に展示室の中で閉鎖部分ができたり、工事の音がしたりするのは、11月～3月くらいの間の見込みです。

リニューアル工事予定表

	閉鎖・工事ゾーン (現在のコーナー名)	新規オープンゾーン (新しいコーナー名)
2007年度	「府中のおいたち」「土の中の文化」一部 「府中の自然と生物」	
2008年度	各コーナー壁際通路、中庭、ギャラリー	「くらやみ祭」
2009年度	「府中の生業と年中行事」 「宿場、街道の町ー府中ー」	「子ども歴史街道」「体験ステーション」 「第2特別展示室」
2010年度	「近代から現代へ」「天文展示」	「中世の国府と合戦」 「宿場とそれをとりまく村」「府中の近代」 「鎮守のまつり・家のまつり」
2011年度	「土の中の文化」「国府とその時代」 「中世の府中」	「都市と緑と」「宇宙への誘い」
2012年度		「ムラのはじまり」「古代国府の誕生」



2007年度の工事箇所

平成19年度 1期工事期間中

工事中
撤去
既存展示

実際に工事に取り掛かると、止むを得ず変更することもあると思われるので、上の表は一応の目安とお考えください。

さしあたり、2007年度の工事箇所は、左図のとおり予定しています。